

テレホン法話 2018年2月前半

「鬼は外 福は内」

岐阜教区駐在教導 橘 出

2月3日は「節分」です。私も小学校に入る頃までは、豆まきをしていた記憶があります。その頃は、父が鬼のお面をかぶり「鬼は外、福は内」といって、我が家ではピーナッツを投げていました。節分の豆まきの起源は、太陰暦でいう大晦日に「みんなが健康で幸せに過ごせますように」という意味をこめて、今年一年の厄や災難を追い出す意味で行われてきたようです。

さて、明治時代に「日本資本主義の父」といわれた渋沢栄一は、

「40、50ははな垂れ小僧、60、70は働き盛り、90になって迎えが来たら、100まで待てと追い返せ」

という格言を残しています。これは渋沢の「人生はかくありたい」という理想論・精神論なのでしょう。

一方、昨年ベストセラーになった『90歳、何がめでたい！』の著者・佐藤愛子さんは、

「ああ、長生きするということは、全く面倒くさいことだ。耳だけじゃない。眼も悪い。始終、涙が滲み出て眼尻目頭のジクジクが止らない。膝からは時々力が脱けてよろめく。脳ミソも減ってきた。そのうち歯も抜けるだろう。

なのに私はまだ生きている。」

といわれました。この90歳を超えた“おばあちゃん作家”の本音トークが、多くの読者の共感を得ているのでしょう。

私たちには、「不都合なことは、来ないでほしい」という気持ちが常にあります。しかし、お釈迦様がおっしゃるようのように、いくら幸せを願っても、老いと病と死は、ひたひたと迫ってきます。木村無相さんは、こういわれます。

「ご縁 ご縁 みなご縁 困ったことも みなご縁 南無阿弥陀佛に遇うご縁」

私たちが「ご縁」というとき、縁談や就職など自分にとって都合のいいことがかなうときばかりに、この「ご縁」という言葉を使います。しかしここでは、たとえ来てほしくないことや災いが起こったとしても、やがてそこにも大切な意味があることを教えてくださっているのではないのでしょうか。

災いの意味が転じられること、それを阿弥陀さまの他力というのでしょうか。

南無阿弥陀佛